

# 「授業の工夫」

所属	教養教育センター	氏名	高桑光徳
テーマ	学習者の多様性を尊重する		
<p>今回、総合企画室から「授業の工夫」ページの執筆依頼をいただいた。経験豊富な方々を差し置いて私などに依頼がきたのは以下の理由に他ならない(と思う)。まず、今年度から教養教育センター外国語教育部門主任として FD 委員会のメンバーになったこと、それから、その FD 委員会の議長である野沢副学長と「内なる国際化」プロジェクトを通じて少なからず面識があったということである。そもそも、学生による授業評価の結果から判断すれば、私の授業はひいき目に見ても「並」である。したがってこのような依頼をお受けすることには躊躇いも戸惑いもあるのだが、他山の石となれば幸いである。</p> <p>不器用な私には「工夫」と呼べるような仕掛けがないので、普段から心がけていることを 2 つお伝えしたい。ひとつは、研究結果と現場を混同しない、ということである。先行研究による知見が重要であることは言を俟たないが、言語教育の分野のように生身の人間である学習者が調査の対象である場合、他所での研究結果がそのまま現場に活かせないことも多い。学習者の能力や学習動機、学習スタイルなどが多様だからである。たとえば、英語母語話者の多い地域における英語学習と日本での英語学習では、そもそも英語使用についての前提が違うので、研究結果よりも現場で実際に会う学習者の状態を重視している。</p> <p>ふたつ目は、学習者になるべく自信を保てるような学習環境を整えることを心がけている。具体的には、授業や課題の手順を変えないことで、学生の予測が可能になるようにしている。日本では日常生活において英語を使うということが、一部の人たちを除けばほぼない。言語習得にはその使用が欠かせないが、使用する機会も動機付けもあまりなければ、習得が困難でもそれほど不思議ではない。ところが、あたかも「修行」が足りなかったがごとく過度に自己反省し、傷ついている学生が多い。授業を学生の想定内の範囲におさめ、学生が自信をもって授業に臨めるようにすることで、英語が苦手な学生でも英語を学ぶ力がないわけではない、ということに気づいて欲しいと考えている。</p> <p>冒頭の経緯で執筆を引き受けたが、自分の授業実践を振り返る良い機会をいただいた。日々、授業後は反省と後悔の念に苛まれて足元ばかりを見てしまうくらいがあるが、こうして改めて自分が心がけていることを見つめ直すことで、前を見て進むことを思い出した。確かにこれもひとつの FD である。</p>			